



TITLE:

本誌225號口繪寫眞"フレンド彗星"
について

AUTHOR(S):

CITATION:

本誌225號口繪寫眞"フレンド彗星"について. 天界 1940, 20(228): 173-173

ISSUE DATE:

1940-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167978>

RIGHT:

ザクをひらめかせてゐるのである。それから、支那の風である。風の吹いて來る時、蝗軍の恐ろしい襲來を見る事がある。村里の、青いものは、柳の葉となく、畑の菜ツパとなく、あらゆる青いものを蝗は食ひつくす。その爲め、村のものは、極度に之を恐れ、太鼓や銅鑼で騒ぎ立て、大旗を振り、蝗のおりて來てくれないやう、示威運動を、村總出で以ておこすのである。この爲め、風の字をよく見つめてゐると、“虫”の字がある。これは、蝗が要素として取入れられてゐる譯である。風が吹く時は、颶風(コワ・フォン)と云ふのがあるが、其の時、そこでイナゴの先生の來るのをひどく氣にする。あらしの事は聞天氣(ナオ・ティエン・チ)といふのであるが、これは、誰しも、船で航海中とか、山登りの時とかに、特に氣づかはれるのである。其の時、よく云ふ語であるが、我怕是遇聞天氣(ウー・パー・シー・ウィ・ナオ・ティエン・チ) (譯 “わたしは荒れにあひはしまいかと、恐れる”) と、かやうに云ふのである。聞天氣は、前にもいふ通り、有氣音なのであるから、きつく云ふのである。それから、雷の事である。北京あたりでは、初夏の頃から、“つゆ”とでも云ふべきか、少しも雨を伴はずして、一天かき曇り、唯、どこからとなく、ゴロゴロと雷鳴のする事がある。之が、あの、蒙古風を伴ひ、火鉢の灰を投げつけるやうに、砂ほこりを巻き起こして來る。其の時は、とてもたまらぬ。外出の時、此の蒙古風にでも出くはさうものなら、紅塵萬丈の中に巻きこまれ、殆んど往生させられるのである。口の中、毛髪の間、あらゆる處、あます處なく、埃が這入つて來る。これは北支に於ける一種特別の氣象なのである。経験せられた人は思ひ當る事であらう。尙ほ、中支方面では、山上に白雲濛濛と閉ぢ込むる所を、よく見る事であらう。

自分どもも、廬山の煙雨や、浙江の潮は、幾度か見た事がある。雲煙とか、煙雨とか云ふのは、江南風物の著明な一題材となつてゐる。又、“煙波江上、人をして愁へしむ”等と云ふ黃鶴樓の詩の結句もある位である。かうした煙波、煙雨といふのは、凡て白霧、煙霞を指していへるもので、火を焚いた時に出る煙の謂ではないのである。此の邊りは、日本語のケムリと丸きり異なつてゐるのだから、其の事を注意しておく。(「支那語漫歩」より)

本誌 225 號口繪寫眞 “フレンド彗星” について

この寫眞は静岡縣島田町の清水眞一氏が去十一月 7 日から毎夜連續撮影したもの一つで、同 14 日の夜、83 分を隔て、10 分間づつ二重露出せしもの、其の露出中心時刻は、第 1 像(東)が 18 時 22 分、第 2 像(西)が 19 時 45 分。寫眞のスケールは、1" = 6 cm.